



看護学生の採血実習に伴う不安反応に関する研究

鈴木, 志津枝 ; 津田, 紀子 ; 川畑, 摩紀枝 ; 宮脇, 郁子 ; 神谷, 和世 ; 中西, 泰弘 ; 細川, 順子 ; 新田, 麗子 ; 矢本, 美子 ; 松本, 比佐江 ; 渡辺, …

(Citation)

神戸大学医療技術短期大学部紀要, 6:85-90

(Issue Date)

1990

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/80070130>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/80070130>



看護学生の採血実習に伴う不安反応に関する研究

鈴木 志津枝¹, 津田 紀子¹, 川畑 摩紀枝²,
 宮脇 郁子¹, 神谷 和世¹, 中西 泰弘¹,
 細川 順子¹, 新田 麗子³, 矢本 美子¹,
 松本 比佐江¹, 渡辺 和子¹, 野崎 香野¹

緒 言

不安とは、一般的に漠然とした気がかり、いらだち、神経過敏あるいは恐れ of 感情であり、未知のつかみどころのない危険や新しい経験に対する反応である¹⁾と言われている。不安はひとつの感情であり、個人の主観的経験であるため直接観察できないものである。しかし、不安は様々な精神生理学的な随伴症状を伴うので、これらの現象によって不安の存在は認められている。この現象を不安反応²⁾と呼ぶ。不安反応の性質は不安の程度によって決定される³⁾と言われており、不安反応を注意深く観察することによって不安の程度を判断することが可能であると言える。

看護教育においては、学生にとって不安を感じる新しい体験が多くある。これらの新しい体験に対して、学生は様々な不安反応を示している。それらの学生の不安に対して適切な援助や方向づけがされないと不安はさらに増大すると考えられる。教師がその場面場面で早期に学生の不安の程度を把握することができれば、適切な援助の手掛かりを得ることになるだろう。

我々は、既存の研究⁴⁾において、関学版 STAI を用いて不安の程度の高い学生の把握について検討してきた。今回は、不安の程度の高い学

生を見出すチェックリストとして、不安反応チェックリストを考え、学生の不安状態の測定について検討したので報告する。

対象と方法

1. 対象者

神戸大学医療技術短期大学部看護学科1年次生に開講している看護技術実習のうち、採血実習の前に実施される無菌操作実習において、不安から生じる不安反応が強く表われた女子学生（以下、高不安反応群とする）11名と、ほとんど反応が表われなかった女子学生（以下、低不安反応群とする）11名の計22名を対象とした。選定方法は、次の通りであった。看護技術実習担当の教官7名がひとりひとりの学生の無菌操作行動を観察し不安反応が強く表われた学生とあまり表われなかった学生を選んだ。その年齢は18～19歳であった。

2. 方 法

1) 測定用具について

測定用具として、不安の程度を測定するために関学版 STAI を用いた。さらに、不安反応の出現の程度を測定するために、不安反応チェックリストを用いた。

不安反応チェックリストとは不安を伴いやす

1. 神戸大学医療技術短期大学部
School of Allied Medical Sciences, Kobe University
2. 北里大学看護学部
School of Nursing, Kitasato University
3. 帝京平成短期大学
Teikyou Heisei Junior College

い看護技術実習時の学生の不安反応の出現の程度を把握するために作成したチェックリストである。項目は表1に示した。これらの8項目はGail, W. S. と Sandra, J. S が不安に関連する行動として示した生理的・心理的・情緒的・行動上の反応⁵⁾の中から観察可能な反応を選び決定したものである。テストは各項目ごとに、まったくない・いくらかある・かなりある・はっきりあるの4段階で示し、それぞれ1点・2点・3点・4点と点数化し、総合計得点を各対象学生の不安反応得点とした。

表1 不安反応チェックリスト

	ま っ た く な い	い く ら か あ る	か な り あ る	は っ き り あ る
1 手がふるえる	☐	☐	☐	☐
2 身体がかたくなる	☐	☐	☐	☐
3 顔がこわばる	☐	☐	☐	☐
4 顔面が紅潮する	☐	☐	☐	☐
5 汗がでる	☐	☐	☐	☐
6 涙がでる	☐	☐	☐	☐
7 行動が停止することがある	☐	☐	☐	☐
8 動作が緩慢である	☐	☐	☐	☐

2) 不安反応チェックリストの客観性について

不安反応チェックリストの客観性を評価するために、注射法実習において、3名の教官がこのテストを使用した。その結果、各観察項目ごとに、①83.30%、②83.30%、③81.65%、④86.64%、⑤81.65%、⑥100%、⑦83.30%、⑧83.30%の一致率が得られた。

3) 本調査について

採血法実習時の対象学生の不安の程度を測定するために、関学版 STAI を平常時、当日実習開始前、採血直前、終了直後に実施した。平常時は実習開始1週間前の講義終了時に実施したものをを用いた。同時に、不安反応の出現の程度を測定するために、不安反応チェックリストを

用いた。チェックリストは、2名の教官が対象学生の状況を観察しながら記載した。但し、対象学生のみこれらテストを行うことは、それらの学生の不安反応を高めるのではないかと考え、研究意図を説明し全員の学生に実施した。

4) 分析方法

不安の程度(STAI)と不安反応の出現の程度に関して統計的分析を行った。有意差の検定には Student-t 検定を用いて、危険率 5% 水準以下を有意差があるとした。

結 果

1 STAI の変化について

特性不安については、高不安反応群と低不安反応群のそれぞれの平均値と標準偏差は 46.09 ± 8.63 と 40.36 ± 10.44 で高不安反応群の方がやや高かったが、有意差は認められなかった。

状態不安の変化については、表2に示した。高不安反応群では、実習開始前と採血直前の状態不安は平常時に比べ有意に上昇 ($P < 0.01$) し終了時の状態不安は採血直前と比べ有意に低下した ($P < 0.01$)。一方、低不安反応群では平常時と実習開始前の状態不安に有意差は認められなかったが、採血直前の状態不安は平常時よりも有意に上昇 ($P < 0.01$) し、終了時の状態不安は採血直前に比べ有意に低下した ($P < 0.05$)。両群間の状態不安は、平常時および終了時には有意差はなかったが、実習開始前と採血直前には、高不安反応群の方が有意に高くなった ($P < 0.01$)。さらに実習開始前と平常時、採血直前と平常時の状態不安の得点の差も、高不安反応群の方が有意に高かった ($P < 0.01$)。(表3)

2 不安反応得点について

高不安反応群の不安反応得点の平均と標準偏差は 16.45 ± 2.42 で、低不安反応群は 10.09 ± 1.38 であった。高不安反応群の全員が低不安反応群の学生よりも得点が高く、両群間に有意差が認められた ($P < 0.01$)。

3 状態不安と不安反応得点との関連

表2 両群の各時期の状態不安の変化

	高不安反応群 N=11	低不安反応群 N=11	
平常時	38.09 ± 5.19	40.45 ± 9.47	
当日実習開始前	57.27 ± 9.19	41.18 ± 10.16	**
採血直前	66.27 ± 8.63	46.64 ± 9.92	**
終了時	44.36 ± 9.28	42.91 ± 10.32	

mean ± SD

** P < 0.01

表3 各時期と平常時の状態不安の差

	高不安反応群 N=11	低不安反応群 N=11	
実習開始時と平常時の差	18.91 ± 8.46	1.00 ± 6.43	**
採血直前と平常時の差	27.91 ± 6.89	6.45 ± 4.52	**
終了時と平常時の差	6.00 ± 10.81	2.73 ± 6.20	

mean ± SD

** P < 0.01

採血直前と平常時の状態不安得点の差と不安反応得点の相関関係をみたが、高不安反応群においては、 $r=0.67$ で有意な相関関係が認められた ($P<0.05$)。しかし、低不安反応群においては、 $r=0.15$ と有意な相関関係は見られなかった。

考 察

1 不安の程度について

今回の研究において、両群間の特性不安得点に有意差が認められなかったため、状態不安についてのみ検討を加えた。

採血直前は平常時に比べ状態不安得点が両群ともに有意に高くなっていることから、採血という技術実習は、高不安反応群の学生だけでなく低不安反応群の学生にとっても不安状態にさせる状況であると言える。採血実習は、血管に

針を刺入し血液を確実に採取するという高度な技術を要求されることや、人間に危害を加えるという脅威、教師に評価されるという状況から考えて、程度に差はあってもすべての学生の不安の程度が強くなることは当然のことであろう。

また高不安反応群の学生は低不安反応群の学生に比べ状態不安が有意に高く、実習開始前より有意に上昇していた。このことから、高不安反応群の学生は低不安反応群の学生に比べ、不安の程度が強く長く持続していたものと考えられた。一定以上のレベルの不安状態の持続は自分の関心を当面の心配に焦点を合わせるため他のことに無関心となり、見ることや聞くこと理解する能力が低下する⁷⁾と言われている。対象の安全や安楽への配慮が要求される採血実習において、他への無関心や理解力の低下等は実習目標の達成を困難にするとと言える。

以上のことから、採血実習のような不安を伴う実習においては、不安や緊張を緩和するような働きかけが重要であると考えられた。特に、不安に対する反応の強い学生に対しては、実施直前だけでなく実習開始前からの援助が必要であろう。

2 不安反応チェックリストと不安の程度について

無菌操作実習時に、不安に対する反応が強くと表われていると観察された高不安反応群の学生は、採血実習においても低不安反応群の学生に比べて、不安反応得点が有意に高いことが明らかになった。高不安反応群の学生は前述したように、採血実習に対して不安を強く長く感じていたため、不安反応が強く表出されたのは当然のことであろう。また、高不安反応群の学生は無菌操作実習と採血実習の両実習ともに不安反応が強く表われていると観察されたが、これらの学生は初めての体験に対して不安を感じやすいのではないかと考えられた。このことについては、これらの学生をフォローしていくことで明らかにしていきたいと考えている。

高不安反応群の学生の不安反応得点と、採血直前と平常時の状態不安得点の差に有意な相関

関係があることから、不安の程度が強くなれば不安反応得点も高くなると考えられた。このことは、不安反応の出現の有無を観察することにより、学生の不安の程度を推測することが可能であることを意味している。すなわち、今回使用した不安反応チェックリストは、学生の不安の程度を推測する上で役立ち、学内実習において多くの学生の中で援助の必要な学生を早期に把握し援助に活用することが可能であると考えられた。

結 語

看護技術実習の採血実習における学生の不安状態と不安反応の出現の程度を関学版 STAI および、不安反応チェックリストを用いて検討した結果、以下のことが明らかになった。

1) 高不安反応群の学生は低不安反応群の学生に比べ、実習開始前および採血直前の状態不安が有意に高く、実習開始前からの援助が必要であることがわかった。

2) 高不安反応群の学生は低不安反応群の学生に比べ、不安反応得点が有意に高かった。

3) 高不安反応群の学生の不安反応得点と、採血直前と平常時の状態不安得点の差に有意な相関関係があり、不安の程度が強くなれば不安反応得点も高くなることが示唆された。

4) 不安反応チェックリストを用いることは、不安の程度や不安反応の強い学生を把握するのに役立つと考えられた。

文 献

1. Henderson, V. Nite, G.; 荒井蝶子他訳：看護の原理と実際Ⅴ 症候と看護 メヂカルフレンド社, 1980, P.169
2. Gail, W. S., Sandra, J. S. 編；南 裕子訳：新臨床看護学大系 精神看護学Ⅰ 医学書院 1986, P.195
3. Gail, W. S., Sandra, J. S. 編；南 裕子訳：新臨床看護学大系 精神看護学Ⅰ 医学書院

1986, P.200

4. 川畑摩紀枝, 川西千恵美, 祖父江育子他: 看護学生の採血実施前の不安と性格に関する研究
神大医短紀要 3 : 159, 1987
5. Gail, W. S., Sandra, J. S. 編; 南 裕子訳:
新臨床看護学大系 精神看護学 I 医学書院
1986, P.200
6. Gail, W. S., Sandra, J. S. 編; 南 裕子訳:
新臨床看護学大系 精神看護学 I 医学書院
1986, P.200
7. Gail, W. S., Sandra, J. S. 編; 南 裕子訳:
新臨床看護学大系 精神看護学 I 医学書院
1986, P.196
8. 大石杉乃, 大原宏子: 採血学内実習前後の不安
について, - STAI, YG 性格検査による検討 -
第19回日本看護学会集録 (看護教育) : 15,
1988
9. 三浦麗子: 注射の学内実習における学生の不安
に対する援助について, - STAI による学内実
習前の不安と知識, 技術, 態度の関係を調査し
て - 第20回日本看護学会集録 (看護教育) ;
215, 1989
10. 岡部聡子: 看護学生の注射実施前の不安につい
て, STAI 日本版による分析とその信頼性・妥
当性 看護教育, 27 : 181, 1986
11. 曾我祥子: STAI (The State-Trait Anxiety
Inventory) について 看護研究 17 : 11, 1984

A Study on Anxiety in the Stressful Situation

Shizue Suzuki¹, Noriko Tsuda¹, Makie Kawabata²,
Ikuko Miyawaki¹, Kazuyo Kamiya¹, Yasuhiro Nakanishi¹,
Junko Hosokawa¹, Reiko Nitta³, Yoshiko Yamoto¹,
Hisae Matsumoto¹, Kazuko Watanabe¹ and Kaya Nozaki¹

ABSTRACT : The authors attempted to analyze the responses about the anxiety of nursing students in the stressful situation (i. e. drawing blood in practice). The psychological tests used in this study were the State and Trait Anxiety Inventory (STAI) and the Anxiety Check List devised by the authors. The authors selected 11 students as a high anxiety-responded group and 11 students as a low anxiety-responded group out of 79 nursing students. STAI was performed three times : first in the non-stress situation, the second, just before drawing blood, and the third just after drawing blood. The authors analyzed the differences on each of the three situations between two groups. The results were summarized as follows: (1) the authors found significant difference on the scores of A-state on STAI and on the scores of Anxiety Check List between two groups; (2) the significant correlation was observed between the scores of A-state on STAI and the scores of Anxiety Check List in the high anxiety-responded group.

Key Words: Anxiety,
State and Trait Anxiety Inventory,
Anxiety Check List,
Drawing blood in practice.

1. School of Allied Medical Sciences, Kobe University
2. School of Nursing, Kitasato University
3. Teikyou Heisei Junior College